

ラスボスの思想(57)

幻覚幸福感

春日信彦



目次

ラスボスの思想 (57)	1
------------------------	---

ラスボスの思想 (57)

伊豆の踊子と幻覚

＊伊豆の踊子は、川端康成の代表作です。作品の考察に入る前に、川端康成の生い立ちに触れてみましょう。彼は、2歳のころに、両親を亡くしました。彼は、幼少のころ、神童と呼ばれるほどの秀才で、東京帝国大学国文科を卒業しました。また、14歳のころには、作家になることを志し、学生時代から、作家活動を行っていました。処女作とされている「ちよ」は、一高時代（20歳）の作品とされています。

＊ところで、彼は、寄宿舎生活時代における同性愛の経験を語っています。そのことから、三島由紀夫と同じような美意識が悪魔のごとく潜んでいたのではないのでしょうか？女性に対する美意識は、成人女性へのそれよりも、未熟な少女への美意識が強かったのではないのでしょうか？今で言うで、ロリコンではなかったかと思われます。

＊さて、この踊子は、アイドル文化の象徴ともいえます。この作品は、映画化され、当時のアイドル、例えば、田中絹代、吉永小百合、山口百恵などが、踊子を演じています。では、女性アイドルとはいかなるものなのでしょう？アイドルの必須条件は、未婚であり、10代で、特定の彼氏がない、清純無垢で、かわいい女性です。

＊作者と読者はともに、伊豆の踊子は、この5条件を満たしていると思っています。また、この5条件を満たしたアイドルに男性は陶醉するのです。少女アイドルは、男性の幻覚幸福感の現れです。これらの条件の一つでも欠ければ、アイドルではなくなります。現に、アイドル歌手は、誕生しては、消えていきます。

＊ここで、読者にとっては、不都合な架空の話を考えてみましょう。踊子の兄、栄吉の日記が、偶然、大島で発見されたとしましょう、そこには、妹の踊子（薫）は、密かに、パパ活をやっていた、と記されていたとしたならば、いったい、歴史的な名作の伊豆の踊子はどうなるのでしょうか？今後、小説の販売はできるのでしょうか？小説の映画化は、できるのでしょうか？この踊子は清純無垢だと信じていた数百万人の男性読者は、いったいどう思うのでしょうか？

＊伊豆の踊子は、作者の実体験をもとに書かれていたとしても、あくまでも、小説だから、事実と異なっていたとしても、作者にも、踊子にも、責任はないと言えるような気

はします。でも、パパ活の事実を隠していた踊子は、多くの男性読者から非難されることでしょう。しかしながら、この踊子には、パパ活をやっている事実を主人公の学生に告知する義務はないのです。一高の学生が、勝手に、少女に対して清純無垢の幻覚を持ったに過ぎないのです。だれしも、恋愛の幸福感を抱きますが、この幸福感は、まさしく、お互いの幻覚が創りだしているのです。

＊芸能界が創り上げるアイドルへの幻覚幸福感は、理解しやすいと思いますが、実は、常識においても、無意識に、幻覚幸福感を抱いているのです。例えば、病院で治療を受ければ、病気は治る。高収入の人と結婚すれば、共働きせず、海外旅行もできて、幸福な生活ができる。大学を卒業すれば、大企業に入社できて、出世できる。この人は、絶対、浮気しない。

＊このような幻覚幸福感が、不幸をもたらす場合が多々ありますが、幻覚幸福感があるからこそ、私たちは、うつ病にならずに、毎日どうにか、生きていられると言っても過言ではないのです。現実には、幻覚幸福感が枯渇してくると、薬物による幻覚幸福感を得ようとする人が出てくるのです。だから、荒唐無稽とも思われるような夢でも、そのような幻覚幸福感を持つことは、生きていく上では役に立つのです。他人と比較して、自分を蔑めるより、人に笑われるような夢を抱いてでも、楽しく生きていきましょう。

一休川柳

＊日本人 民族自決 どこ行った

＊参政党 人気の陰り 見えてきた

＊参政党 求心力を 失った

＊神棚の 牡丹餅食って 頓死する

＊原住民 道徳選挙 いつまでも

ラスボスの思想(57)

著 者 春日信彦

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
